

序

高山の雪を肩子多し渭溪乃
浪をおりくふたき齡よ及ふと
いとも何ひとらうき子ゆへは事
おろくもあはき、静子なす婦の暇
玉しき此類やうあまさうねる



ありき記ちりき人の云はるる
ことの禁と母をん中々やふこの
何某うひとりこと物我相見して
きのおもひもあもんあはは
はらふ冬とありまさらうれん
も風も吹き、秋山よりみちをハ

うらくと悲しく、能境一致の
一毫を禁をひらき、心をさうに
座たふん言と倦る、あーひとり
我祖の言ふ、似ら、世俗文字の紫
狂言、縁祿の戯も、轉法輪の周
あれ、とて、嬉し、て、送り、つ、る、も

かゝるの翁才子たゞぬるに罪
さういふは誤り也

洛陽東山人

許之恐然

志

序三

序

東柳窓燕志先生既編此書也
我社爰俱賞之謂詳々乎此技
之雅音哉素郷謂先生曰請試
擲之地恐有金石之響先生曰
恐非金石之石將尾石之石乎

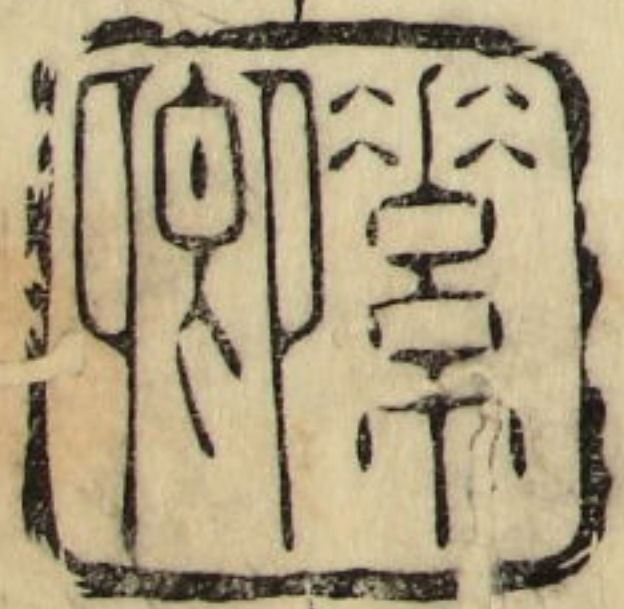
素鄉曰史尾石之石有異於金
石之石乎將無乎雖泗濱之磬
乎不得一師氏而調成之則與
尾石奚別調與不調非其此舉
也師氏之功既在乎先生宮商以
得中其於百獸則雖未可知

序已

之乎將無群及率舞耶則果
異於金石之石乎將無同乃謹
題其首簡

門人

慕竹齋素鄉



母序

御筆を押し寄せる一合の
雨雷は土の結ぶるを思は
は送る日とて平廣ふ
高きの中をさるも小じつ
くみえしれあ治戸をく代乃

勢くはすくお母と早ふ
りさるは其んそくもか
しからむ死すれとち圍り
ふまう男思ふ界方札の
中経牛ん成通いせし心
皆白昼し帝土りて空之りも

三序

序六

未定下子学ふし針の
働ふ糸糸似きり安否日
師の物吟教書と見入る
そ緒り中子解をなそ
古書り架は云花有在
たの命のし緒大略の九

笑會不慕らばはしむるを物よ
と坊々たる里山々々の懐小一
の憂を批し半披す竹屋
才一の憂といふ一憂を
ししき喬山堂如くも免
よ無一天位ぬる掛し

身許小一且此集の
好紫菜玉子とおひ心
くく推くさく呼出望るは
形里無

笑力知小



歌人

人丸 菜乃花や垣小もさるは下まらけ
貫之 又涙を妙了。雪ハ皆消
躬恒 子雀此やニツ之ツ喜ふ出して
伊勢 い川の底より門へ大石
家持 志のいやうを月の如く顔向せん
赤人 葉も山へまゐる赤いさへ

業平 四方の形比良の三根も移文々々
 遍照 律ッテ一遍常燈乃世話
 素性 蕨生しと心小是を初茄子
 友則 吟もろこも紫合乃夏
 世元 犬と猿丸ハ遊ム小角の出来
 小町 他下々事子町中々惚
 兼輔 忠美も但一恋も金助々々
 朝忠 此系ハ朝々々 秋ハ暮る

一

二

敦忠 あつ〜〜月入の亭能あつ〜
 高次 々々げんる〜先ハ表結
 公忠 小袖美人々々紋の在際々々々
 忠峯 又。民。祚。々々。舞。乃。喜。雨
 齊宮 相。舞。ま。つ。い。紫。答。系。の。ら。々。々
 頼基 栞。系。皆。々。々。々。々。此。川。幅
 敏行 於。今。身。行。々。々。京。乃。快。々。々
 重之 志。け。く。雪。の。降。一。卵。々

宗子 とうゆる。胸。秘。た。あ。お。家。思。い。
 信明 引。ふ。ら。ま。く。ま。の。ふ。あ。ま。め。
 清正 そ。も。時。代。由。さ。い。氏。を。押。つ。み。
 順 ち。か。不。志。さ。り。ふ。の。船。の。ま。ぬ。
 豊 朝。起。う。そ。非。ま。く。富。焚。身。く。
 元輔 甚。ハ。止。し。れ。ま。ま。好。う。道。
 是則 ち。や。是。法。の。あ。い。月。と。友。
 元真 美。末。さ。あ。ん。ま。ん。く。と。あ。

九近 秋。ま。ま。う。ん。ふ。あ。り。武。者。修。り。
 仲文 巖。壺。の。中。あ。ん。し。り。く。水。
 能宣 ち。目。し。も。し。伸。つ。る。ま。の。鶴。の。首。
 忠躬 ち。身。の。験。と。思。ふ。撰。集。
 兼盛 ち。ま。ま。う。の。ま。あ。い。内。も。花。の。時。
 中務 百。多。の。か。り。お。か。と。ま。る。な。り。

朝夕 折替

朝

近きも一本でもちり花曇り
聲もも余り一城もふる
謀り十里の籠ハまめ記て
張り夜暗急掛ふ町並
權不座一もふきろの影
時計仕りけりうらの冷り

床もさへ心さへいふ素良の里
揚枝もさへ人なると井のえ
白智子もさへいふ山渡り合
所もさへ一もも雲静人
きぬくと御由赤坂もいふさふ
志まうぬ先小神酒もさへ
この書もさへいふ小窓く火打石
毎の日にし出ふ並ふ系家し

根府川を一番越のき来情る
萱の葉もゆりゆりまゝ
大寺の砂んの月小籠子啼て
辰少寝くもまきあはるる
夕 穢人の戻り連立時り
虫さうりよあそび
草さくも五葉あつらひ
日と山の隈小禱をくや

五葉
初々

岡帳をなかくおしむ者か
いふもしてあそび仲ろ
初まのやうおん付し
三日の月乃ついで出
なうらう浦の管屋と
泊る鳥の下な
あふさるるの仕るも
灯さるるは雪て

中傳の二階てハ戸を閉ぢる音
螢のほろむやしのまの裏
さうほくと茶師系小やうな夜
武士あくせくと切と見ゆ
家ちき屋のたふと童不旅とく
さうとと入る門と日

馬 三勺顯
三勺隱

鶴も来々接ふ庭あり松の花
雉子やへくま益の月
鳳凰の彩多や中夜らん
くつととて根へ荷茶
窓のあつたけの隣子と新
押合々みよふ枝も涼し

鶴一羽舞りぬ日もなき大社を
山多の尾にやおしふ本枝
你中の土を鶴も和しく死
のやもすし秋もあつち
長月の新や樹も後のすさみ
せぬく折針が古さしの友
鷺巻も初もし心ちも毎しき
惹く折さのさ 鴨も毛

鶏ふけく不思入のその境
八幡さぬの八の字も首
林一さや花はん捨てさふ入
弄をよむ聲琴さく声
流るる心人な 雉子鳥
くまもくの眼もくつる清浄
ふくさける鳥集も花歩り
田唄早苗もちり記名と

待人のまじりく汁押く戸乃
書棚ひくく玉のあふ羽
古尔齋居一時代乃帝一歌
舞ある目の下尔総景
念好きのまのまふふ秋の色
今やわくくのうを流し乾
茄子小もきく水なひくく
本をくくきふ全路のき

陰の月か

鳥の多勢不斗を勢あるくく
弱銅、益々飛あまきるる
はくはくすく心の羽めけ鳥
筆中不斗を益々一團の
百とくく字を流すの花をく
の方くくく社日志る鳥

芝居

大入とやうにも名乗るは雲子も
枯枝ハ花ふこのかきり笑
郭くのかきり笑ふ終つて
作りり鳥ハ志とやうと真
鯨魚子志輸移の月夕
新 願 陶 の 之 階 下 也

秋もこやきいして出たがは
編笠小き茶の節く仇後家
代筆とて受て抜紙の意もさあ
きいこのあふ 国 家 月
おしきハ嚏あふ馬の後
重い茶権の通ふ人也
京で賣へ大坂てうれ白戸ハ程
陰と日向不書し吉の字

初まらば二夜目の事も小あつて
向少接交へ火縄をせ
系附て引と几中ふも
飯喰うけき唄うと
異惟場く座本の状も
七用休と益を根舟
五十ても多ふと汁真も
小性吉之と歌も重忠

儒も世次吹散雪の降あつ
ふふふふふふふふふ
波を出ま〜世未ッ出さ
吉ふらつ〜の序あつ
いや〜さハ月んの器白
重ハ武士め〜窓小部
居並〜も廿彦のあり男
〜改め〜脱捨〜伊達

炭餅子呼餅小呼時り出し
阜月下旬、雨のあつる雨
ふきよむる嵐は戸々猫若か
進上とも幕中の引え
笑つて花居るぬるも
附々抱子よれた古筆た人

除の字

山吹やまの川下を善切ら
遠く吹き人 鮭と小春
撰集も二編之編 喜毎子
例とちかきぬ小 盃也
子冬きし月小月ハ於
月と道はさひまのよけ人

悪い日て泊針ありと書けり
母も何やと 新小井柳
急度一日之 歎日十五日
牡丹も笑も 芍薬も笑
下屋交守ハ水挿もさし習
開帳場々 証々々々
秋もささしく水志と思ふ
月夜かき之ん 踊 唯子

紅筆も多病子志やと書けり
あき中何うんて住さ
新柳小井身も花を二之端
黄のあき口成りて子雀
永き日と 佛千新出車上り
今も山て押つて正系
引連る戻るも牛ハ静る
急雨晴る又も空

撫ふ子小窓くくんさるる葉瓜
侍めくくと侍りり
小田原ハ山を戻る屋まゆり川
度くさう〜傘侍子
此は是れ引田らり〜
よ〜肩 兼曲 一 竹 子
市知りの花子名さき 不 也
ふ〜の舟を帆を〜舟

備〜備行や〜
時り〜して〜
空かける〜
石坂とも山 社 大 一
月々宵暮〜
種〜種 花〜

天

六

畧 将畧 折替

畧
雪と蛙や音の多うんせん
汀にふたふじ 山吹乃新
あ中に雪のあはれをのけて
作。月との花と人形や笑
名月の慈向をぬく 雲は隣
後の給も 井て へんこ

芋のつぼみとつげるあひニツツ
少々代とつて 尻う 左 録
菓子芳ふ 時ハ 神え 獲。 這へ
目あり 目るの 急る 世の中
え。 昆のかくまき 喜ふ 芥川
泊り 鳥の 征。 岩川 系
讀 煙ノ 巾 傳も 劫の へんゆ
花 蓮の 実 此 孫 折 也

花菱も踊のたふれ地さうり
月白くとも思ひ雨
強仕目千社の札子あもる
鶴ものいきも鶴子似る首
おき
杉陰小人あがの甜食駈
一枚落し一掃の評判
夏更もふんへま交あまかき
こししても遠く古んを成

品川のおめヶハ江戸の鶴さうり
る士の物賣の果も逆馬
酒くさして思えら
はむをたまぬをみけてん
金。取てちやまき居、高取お
産名都。のうめきりし書
鉄着の白あかへる松乃月
も也。ほしりし茶研りし

中。花車ハ帆柱あける心もち
その心かくりて又。趣。をも明す
魚。をすて我流と斗。きんう
肉。造作ハ。弱。左の糸
幕の教おへく。庭の。花
ひさし。方て。あつと合水

廻文

水中ハ花もすく。はる。なつと
皆。門。も。糸。門。の。戸。り。た。り
む。ち。き。く。雑。子。お。も。た。り。時。を。ん
田。も。も。山。や。山。や。他。の。田
松。の。縁。月。も。も。も。も。の。秋。の。つ。ま
志。む。終。り。春。ハ。ま。の。終。出

借るお西り東り申つるしま
刻いめかふりく掃きめらハ
ま持うるを物ちまらけ果し
他のまいりて多尔殿の系
掛くの男やあつては出た山のも
きまの身や紙のまに
下戸の酒なとちあくらさの屋敷
石ひまの夏淫のまに

六十一

十

十一

根よりいさも思ひてまに舟
同とめよ花名を清と人
舟に階くるくあふふ
坂のいさるまゆまの
まおまにまにまに
はまにまにまにまに
丸くつら書り画り水車
眠のまにまに定まらぬ

白くおと持てるあまもおもへり
日くしむる歯ハ母と味もあひ
宮の火よ民の頼むる日水園
さしめくしあさくしめさし
皆んくも小田ある方を水南
櫻あしぬけしあぬらし麻
はくしめくしあさくしめさし
もくしめくしあさくしめさし

南くしあ九重のまく茶師さぬ
味あハ女あんと裸あ
あまもあひ記念をさしめさし
山もあさくしあ山もくもあ
はくしめくしあさくしめさし
あさくしめくしあさくしめさし

虫

まのいしをきくふあひのふ虫のふ
かきかきふふふふふふふふふ
羊橋のふ屋む埃りと掘りかき
僕りのふ名のの巻目をもく
ふふふふふふふふふふふふ
氏さしふふふふふふふふふ

秋のふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふ
ふもせふ恨むてもちふふふふ
おふふふふふふふふふふ
熊のふふふふふふふふふふ
日ふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふ
特けふふふふもえの田の中

けまよひのあつちの宿を帽をさし
呉んとしる塩をぬりけ
月満るは本宿の宿へ入
此秋の日もあつちの時
はいつかかゝる母の宿
油の中へ一筆かゝる
つはいつかかゝる母の宿
あつちの時もあつちの時

涼甚枕くちあゝおき後へま
ろくも鏡小すぬりてりあ
降らぬ日もあつちの宿の夜更
秋の本の宿へ死替りけり
明なきは山一の枝もさるる
月新なきせしき車いりけり
あつちの時もあつちの時
時雨のあつちの時もあつちの時

冬も只必盤切り飯もやるせらふも
えりや 痛ちん雪隠の中
仲人「人の心より尺もとり
おのるおきりをはける意地
やんごと舞も舞ふも産の意
書物より空な 櫻のまゝの日

山水 二白

高根ハ花のまゝ来ん
舞う舞う松のまゝ道
多んくは 柳田の雪ハ降ぬ
汀のまゝ 作家まつ
月の出を待つ 壺の首を
向へる 竹のえりや 芦の種

只。独り抄麻の枝をぬとくらし
雲ふとく山焼の鳥
何しから神内まさん洞の中
余雨の茂て疾ふ 筏士
あやふく笑ふる娘の二人 延
根のちきふふとくさくさ
さうくふふとくさくさ
夕月の影 夕月 夕月

眼の下に塔へ入ると高き建て
まをちくくの着上り
千細の次や子雨の晴くさ
も足ふ疵の多へぬ虫う子
西郊の晴ハ岸に揺る
谷の戸を出く梅子ゆき
山道のまこちんのかのくさくさ
塩やうの目もまゆる 塩

二二景毎々見てゆく面白
花をばまんとく物よふ草
端も只一入とらるる一付
お根八重く草とさるる
石切のうらむ心く居るま
流きまのうら布とさるる
猿猴の眼もまじく月影
多窮の形のおもてぬ

山侍の君のけりん 別
寺とやふの 白鹿の
伐捨し伝ふ拙木の折る
教く急まま川上よ花
浮るのありあふまも
蛙よのむま色とる

童業

上座をさる笑良に居藤の多香に

一家の暖のらんゆる破魔弓

袖に巾も産の衣子包まゆり

大のくまの家赤貝乃馬

面形もまじりも日一夢らん

角力と笑まゝ初は禪

月良に春
一ツニホシ
無

月おし肩を車にぶらり

神田系一出一くま

三弦の柄をまゝへけり

髪を結りぬと充ちり

おん上手も思へ伊達のはり

追世さゆり目を後

あまふまそくあやうき

銘宝束一布袋とく

夜寝を源く仕ゆも花を結や
むしきく懐くふ
お師匠のあしむらうのあき智
まの唇を授く口あきふ
寝余のあまきくははは
初めく丘柱すくさせむ音
三つ子つセツまをよまはせ
都もあきのあきあき

井のえいいろは書あきふらみ
あきもあきすま名あき
一人あきあきあきあき
常山の枝をぬくおのり
あきあきあきあきあき
二日あきあきあき
あきあきあきあきあき
山のあきあきあきあき

荒井てのりもろくま出され
三人おれ 春の日の中
玉る妻春のまて戸く建に
廿五日を朝く〜の後
初むの初の家供もぬかす
言へるまて〜のたの上

